



戦争 争 印出 美由紀 神奈川

戦争に触れずにロシア人の友がけふラテアートのスタンブールぬ
「戦争の黒きけむり」とただ一度詩へり五月ロシア人の友は
半年を母国の悪に触れつづけ友はたずむコヘレトのごと
星ひとつ灯るひびきのバンドウーラかつて盲の楽師の弾きし
豊水梨届く雨の日重すぎる添付ファイイルを送付できない

ゆとりの刻 羽床 員 子*神奈川

散歩する亡夫の姿を見つけたたり一年前のゲーグルアースに
一周忌済みてゆとりの刻を得てマニキュア塗りて心遊ばす
中秋の明月見るとLINEありテレビ漬ける我を案じて
葉を広げのびのび育つ白オクラ憶良惚びて花咲くを待つ
「ダストロイ」と名付けし孫の作品はミサイル握る巨大な拳

木 地 屋 前田 亜津子*神奈川

木と共に生き木に恋をして撫でて轆轤を回す木曾の木地屋は
迫空も訪ね来たのか歌集には「木地屋の家」の歌十数首

建具屋を営みし祖父の細工場のおが屑の匂いがふとよみがえる
くるくると巻いた鉋くず髪に付け金髪カールのままごと遊び
幼き日々飽かず見ていた祖父の手から生み出されゆく木製建具を

健 診 荒川 ゆみ子 東京

母の住む家に行くも在る(隅)に置かれてる物おほかた重い
軒下にふせた素焼きのその鉢で咲いてた花を忘れてしまへり

鈴木 竹志選 「あすなる集」特選

新 球 場 池松 卯 月*北海道

新球場工事現場の進捗を夫と見に来たこれが三度目
駅前のタクシーに乗り新球場工事現場をぐるりと回る
何も無い土地にドデンと球場を建ててここから街が始まる
側面に「ES CON FIELD」のロゴがキラリと光る新球場よ
夢のある工事現場がめつきりと減ったのだなあ今の日本は

「11ぴきのねこ」 川浪 紋子 青森

堪へしが馬場のぼる展の最終日「11ぴきのねこ」に会ひに行きたり
三戸は「11ぴきのねこ」で町起こし着ぐるみの猫街走るらし
その昔馬場のぼる氏がゆうらりと三戸町でバス降り行きき
楽しみは三浦医院の本棚の「11ぴきのねこ」シリーズを読むこと
かやつり草ゑのころ草も揺れ上手けふの愁ひに添ふほどの揺れ

傘袋失くした折り畳み傘はひらく前から疲れて見える

やはらかな光を採りて女子大の図書館みたいな健診フロアー
採血の注射針から目をそらす逸らしてゐても(ちくくつとします)

松尾 祥子選

三十六の夏

清水 佑太郎*東京

血小板少ない母の遺伝子で血が止まらないからだなのです

四十にして惑わずと聞く人生は並行世界の特殊な人生

妻が脚くじいたことで九年振り二十二回目の車の運転

まだ俺の夏は終わっちゃいねえぞと必死にTUBEとサザンを歌う

宿題をひとつも終わらせられぬまま三十六の夏が終わった

あなた的大海

富 永 恵美子*東京

郵便受けを開けたくない夜 今日はずもう受けとりすぎてしまったみたい

倍速で見たい聞きたい動きたいエスカレーター駆けあがる足

怖いものいくつかあって一番は子どもの頃からデイズニールランド

度の強いわれの眼鏡はわれにだけやさしいそれがすこしかなしい

正直に告白すると眠くなるあなた的大海とつながってゆく

真水に放つ

前 中 映 東京

透明なパックの中を生き延びた土用蛸を真水に放つ

長い夏 長い人生 つめくさの花は開いたまま枯れてゆく

やられたらやりかへすのは正しいか夜空に黄のTシャツを干す

雨が降つたら窓を閉めよと告げてくる車掌の声はニッポンの声

全世界がさかさに見える眼鏡でも三日かければ慣れるといふよ

匿名配送

高橋 梨穂子*新潟

数式のように短詩のようだったきみがぐにやくにや書く試し書き
まず光それから音がやってきて駅のホームに来る新幹線

ドーナツを食べるわたしの体内にひとつふたつと増えていく穴

影だけが鏡の国にまで行けてひかりはずっとこちらの側ね

雨をよけ走る 匿名配送で誰かとの出会い別れる時代

十 円 安

栗 三 誌 野*富山

物価高じわりじわりと染みてきて十円安に敏感になる

秋風にのりてあきつは庭に飛ぶ快晴の午後静かな時間

稲刈りの後の香のする帰り道過去の記憶が立ち上りくる

私には見えないものが見える人紫外線見る蝶々のよう

一日に何度も鏡を見るけれど自分の事は分かっている

秋のさざなみ

内藤 丈子 福井

みづうみを船と鉄路でゆく朝はどこまでも青い秋のさざなみ

ハンモックにゆられて愛でる名月よ気比の松原の波音ゆるる

秋茄子をゆつくりもぎゆく母の背に赤とんぼとぶけふの新涼

さしも草燃ゆる伊吹の山のほり蓬アイスで涼をとりたり

月の船ゆうらり漕ぎて父は来る胡瓜の糠漬そなへる夕べ

水上 芙季選

慣れすぎた夏

高橋 みどり*愛知

「かあさん」も「ママ」も使わず「母」という二人称にて子は我を呼ぶ

桃色の蝶が空へと昇りゆくまぼろしの見ゆ 森英恵さん逝く
陽性の生徒に電話で聞き取りをする手順にも慣れすぎた夏

「二年をかけて生徒の成長を見守る」チームにわたしはいない
玉入れの途中で抜けて薬局へ走る経口補水液尽きて

木造りの小屋

安井 喜代子*愛知

来春に職ひく息子は蓼科に山小屋買いぬ是非にゆきたし
木造りの小屋の二本の太柱つるとして肌触りよし
庭さきにあいに入りこし子鹿あり怖れを知らぬ瞳うつくし
訪れし二十年ぶりの御射鹿池柵にかまれば観光地と化す
女神湖の北に聳ゆる八ヶ岳薄雲かかれど存在感あり

茜の世界

社河内 久美子 三重

迷ひなく垂直に針を突き刺されワクチン接種は二秒で終はる
夕焼けが町を茜に染めるとき茜の世界の住人となる
あの角を父が手を振り来るやうな茜に染まる秋の夕暮
ふんはりと洗濯物を取り入れて秋のにはひを両腕に抱く
小さき指を三本立てる練習し二歳は明日の誕生日待つ

数珠繰り

塩山 美恵子 兵庫

娘からどうしてるかと訊ねられお利口に家居してると答ふ
コロナ禍の家居のゆゑか過ぎし日が録画のやうに甦りくる
人生の一コマ一コマでいねいに巻き戻したり猛暑の葉月
地藏盆に世界の平和ねがひつつ数珠繰りをせり車座になりて
大切なお知らせのごと四十雀かどさきに来て大声で啼く

母のポケット

石田 信夫*鳥取

絶対に離さないからというように凌霄花電柱を巻く
十五夜の丑三つ時に母目覚め「帰る帰る」とかぐや姫めく
デイクアよりほまちのごとく持ち帰るティッシュで埋まる母のポケット
「しばらくの間休業」の張り紙のあるカレー店三年過ぎぬ
ちやちやかと牛乳瓶のふれる音今朝は気づかず母に起こさる

パワー全開

樋口 八重美*広島

鳴く声を蟬は次へとゆずりたり益過ぎてより聴く夜のしらべ
空をとぶ絨毯のごとき雲にのり妣たずね来よわれ待つ家へ
「にんにくのパワー全開」言いながら二キロの道を通う六歳
ランドセルせおつて水筒ぶらさげて傘さし帰る六歳ひとり
一時間歩いて帰り宿題を全て終わらせ疲れる六歳

原賀 璽子選

秋

井上 喜美子*山口

防衛費の増額決まり緊張のにわか増しく 戦争はイヤダ
独り居に残る時間をいかに生く 思い迷いていつか睡りぬ
遺影にと探すアルバム二十年前の写真はちよつとまずいか
強風に咲きしばかりの秋バラが試練のごとく煽られており
台風に落ちしりんごでジャムを作り届けてくれしりんご園の友

八月 某日

永田 恵美 福岡

恒例のメガネを探すルームツアー今日はレンジの上で見つける

川施餓鬼いまは流せぬ藁の馬流れを見つめ佇みてをり

最果てのタシユクルガンのバター茶を飲む夢をみるカラメル色の夜
灼熱のトタンの上の猫を思ふ クーラー壊れた八月某日
街角で辻説法をする人は神学生か汗を拭はず

まゆごもり 小松省己 佐賀

庭に摘む桑の実のジヤムを蚕のごと毎回なめてまゆごもりせり
葉月尽大根の種を蒔き了へて日照雨に降らる慈雨と思へり
在原行平の名にちなむと言ふゆきひらなべて焼酎わかせり
薑かかよりジンジャーの方が馴染ある生姜の薬味を麵つゆに入る
崩潰のワールドトレードセンターゆ自由の女神見し日もはるか

紙の屋根 山本辰雄 長崎

夕されば秋の虫など鳴きをりぬ熊蟬などはとうにかくれて
盆すぎて夾竹桃の残れるを一花ひとばな数へてをりぬ
父在して雨漏りの夜の水滴がはねてあたりき小どんぶりに



田中 愛子選 「その二集」特選

紋 白 蝶 吉弘藤枝 埼玉

木がくれに白き車が上りゆく山の高きに人家の見えて
台風の去りたる朝の空に見えビルの真上に翺雲出づ

「ボクのうちの屋根は紙でできている」 詩に書きたるは六十年前
籬の木の種を落とせしはカラスかな庭に影なす大樹となれり
朝の森 新屋希子 熊本

昨年は歩行器から見し朝顔がやうやく咲けり父の墓前に
あさがほの蔓がたがひに絡まりて寄る辺をさがす秋風のなか
嵐過ぎ折れ伏す木々の抵抗を車体に受ける夜の山道
嵐後の折れ木を車輪に巻きこみて車降りれば夜川の轟音
嵐去り朝の森から現れつたてがみ濡るる放牧馬の群れ

あかとさくたち 川越 三紀子*宮崎

けたたましく鳴き我を呼ぶ新参の小犬にあわて若やいでいる
「その花はマリーゴールド」香をかける犬を促しまた歩き出す
八月のあかとさくたちゆるゆると蕾解けゆく朝顔の花
「母さんに似てるね」と言われ「嬉しい」と子がわらうのでおいに照れる
登校の子ら整然と並びゆく宇宙に向かう飛行士のごと

コスモスの花の一部と見ゆるまで紋白蝶は夕べ動かず
味覚さへ衰ふるらし味付けも粗雑となりぬ夫亡き今は
原発は必要なりと言ふ息子言ひ負かされて咽のどの乾く

夏の音 人見江一*神奈川

太陽の塔に集いて夢を見し少年たちも老いの入り口

かなかなと祭囃子と遠花火過ぎ行く夏の音はなつかし
いつのまに素知らぬ顔で近づいて居すわる猫のようだね秋は
矢車の花を探すも揺れるのはコスモスばかり啄木旧居
戦死したロシア兵にも母がいてきようだいがいて帰り待つはず

カ
ラ
ス
福
島
健太郎
神奈川

いつも来てわれの様子を窺へる屋根の鴉をニンジャと呼びむ
鳴き声の淋しくあれどさびしがるカラスなどをるまい 珈琲にがし
交通の不便な地への旅なれば危がみつつもクルマにて行く
お盆にも子は帰省せず独り身を日照りの街に晒してをるや
逆さまにうつかり切手を貼りたれば取り返し不可の仕儀とはなれり

音のなき街
奥
浩
昭
東京

猫よけのペットボトルは陽に焼かれ溶け出さんとす 音のなき街
鳴く蟬に夏の終りを告ぐること昼の風たち木の葉ふるはす
虫の音にまじりて蟬は朝を鳴くコスモスの花風にそよぎて
川風のそよと入り来る窓ちかく堀辰雄の「晩夏」また読んでゐる
ゆふぐれにツクツクボウシを聴いてをり人影のなき野川公園

「推し」
山
口
文*
東京

病院の夜は静かにほの暗く窓の外からネオンが照らす
点滴筒しずくの落下が脳内で音を立ててるティットティットと
「推し」という言葉はたぶん片恋と言うことなんだな家路を急ぐ
幾度でも会計帳簿やり直す仕事残して眠つた夢で
何もかも面倒くさい秋の日に家の片隅雨漏り発見

宮里
信輝選

違う
青空
佐藤彩
湖*
新潟

夜更かしの褒美のごとく現れし二十三夜のお月様見る
五時半の面談希望する保護者わたし勤務は五時までなのに
「職場体験」の生徒が拭いた窓ガラス昨日までとは違う青空
「映える」こと知るか知らぬか白鷺は青田バックにポーズを決める
清里の野菜直売安すぎと問えば「楽しんでるんだ」と笑う

青空もらふ
池田
あつ子
愛知

ゆく夏のけぢめのごとく書く手紙万年筆は夫のおさがり
ふはふはとその場凌ぎに生きてきてブレイキかける夫もゐない
言ひ様がないときに出る「味がある」時々言はれ時々使ふ
素麺の白木の箱に蟬を納め夏を送りぬ燃えるゴミの日
ひと夏の埃に曇る窓を拭き窓のかたちの青空もらふ

白秋歌集
小田
沙也加*
愛知

お守りのようにリユックに忍ばせる白秋歌集の凜々しいことよ
足首を川に浸せばペディキュアが剥がれて足先から終わる夏
川底に素足が触れてもうずっとずっと昔の私に戻る
陽光を川面は黒くはね返し一目で深さなんて分からない
はらはらと貝の化石は花弁のように川下へ流されていく

電車は運ぶ
中村
泰子*
京都

花柄のシルバーカーを我がベントツと名付けてゆるりドライブする母

母逝きて赤い箸だけ引き出しに置いてきぼりの夕餉の支度
会いたくて亡き母捜すこっそりと駅のホームや人混みの中
石庭を見つめる友は凜として独りに戻る決意の背中
窓見つめ前髪チエック眉チエック少女のドキドキ電車は運ぶ

ガリヴァー旅行記 大久保 伸 子*兵庫

剪定の夫ねぎらうか夕暮れにその幹で鳴くつくつくぼうし
裏口の玻璃戸にいつも来る蛙夜すがら餌を捕る台風の時も
わが袖に止まれる蝗虫ちよつと待て君の名前を知りたいからね
死ぬ蟬のまわりに蟻は小石積むガリヴァー旅行記読みいるごとし
朝食後はお薬タイム夫と吾は色とりどりを手の平にのせ

福士 りか選

遠出は楽し 芝 崎 千 鶴*和歌山

帰省の子寝不足解消したと言い帰路につくなり盆休み明け
クチナシの若葉みごとに食べつくす犯人は謎してやられたり
初めての発表会に七歳は落ち着き払いてピアノに向かう
通院のためと言えども久々の夫と二人の遠出は楽し

リトマスの青 舂 岡 慶 子*広島

さわやかなパイヤサラダの完食で私の体リトマスの青
ひんやりと秋風の吹くキッチンに鈴虫の声静かに響く

丸眉の黒柴リクは優しくオス犬だけど番犬ならず
自らの重さに耐えかね折れた枝熟せず絶えた若き柿の実
台風が遠くかなたへ通り過ぎひばり鳴くなり竿かけ直す

秋の気配 三好紀子山口

ころころと転がるやうに啼ける虫茅野に聞けば秋の気配す
秋茜フロントガラスに当たりたりしばし止まりてやがて飛び去る
窓をはふ守宮は腹の生白く夕ぐれどきを動かさずにある
日本海に沈む夕日を追ひかけて車走らす北浦の道
嵐過ぎ波おだやかな海峡を船は行き交ふ淡き夕月

庭隅に咲く 石本洋子佐賀

「一生は怵へることの連続ぞ」疵の声聞く寝逸れをれば
自らの場を心得てツユクサは庭隅に咲くそれでも青く
茄子の実のテントウムシはこのわれを敵と見做すか葉裏に隠る
隣家との境を越えてスズムシの声聞こえくるもう秋なのだ
美容室の雑誌に和男の名を見出づ恋を知りたるころの人の名

秋の使者 牧島幸造 鹿見島

子らの母校大島高校春夏の連続出場一步およばず
悩みごと一つ解決した後は次も解決しさうな予感
秋の使者トンボが飛び交ふ畑の上見れば気力がわき出ることし
暑き日は早朝夕畑に出て昼餉の後はひと眠りする
健康の為と言ひつつ晩酌にビールと焼酎隔日に摂る